慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ジャップの収容所』紹介
Sub Title	Jap camp : translation and annotation of selected interviews with citizens of Owens Valley
Author	池田, 年穂(Ikeda, Toshiho)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1998
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.43 (1998.) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000043-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Ann. Rept. Kyoritsu
Coll. Pharm.

『ジャップの収容所』紹介

池田　年穂

Jap Camp–Translation and Annotation of Selected Interviews with Citizens of Owens Valley

Toshiho IKEDA

During WW II, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom *were* American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been held. It seems, however, to be rather difficult to find the documentation of interviews with the 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period.

California State University Fullerton Oral History Program,officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp.

Four short interviews with female Caucasians will be introduced in this article. Readers might be recommended another book, Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans speak Out,* 1986, which contains interviews with Japanese-American internees. The text used for translation is *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley,* 1978, CSUF. The title of the book was originally *Jap Camp* and was changed into the title above through the contest and charges from Japanese-American militants.

I. オーラルヒストリー・プログラムについて

二十世紀に入って「録音」という技術が誕生したお陰で，インタビューが社会学的研究の重要な武器の一つとなった。

カリフォルニア州オレンジ郡に位置するカリフォルニア州立大学フラートン校（CSUF）のオーラルヒストリー・プログラムは，1966年に講義形態として始まり，翌1967年に公的に発足している。ケースによっては20時間にまで及ぶ2,000人近い個人とのインタビュー，延べにして3,500時間以上のテープが保管されている上，48,445頁の文書として記録されている。インタビュイーらのインデックスだけでも，504頁のShirley E, Stephenson, *Oral History Collection,* 1985（以下OHCと略記）としてまとめられている。

その中でもとりわけ筆者の関心を惹くのは，1972年にアーサー・A・ハンセンを長としてから，より精力的に進められることとなった，第二次大戦中の日系米人強制収容についてのインタビューの数々である。筆者の調べでは，インタビュイーは140人（同席者は除く），インタビューの時期も1966年から1984年にまたがっている。因みに年度毎，性別，日系かそれ以外かの別については下のようになる。

1966年	6名,	1968年	1名,	1971年	6名
1972年	9名,	1973年	51名,	1974年	13名
1975年	3名,	1976年	17名,	1977年	1名

1978年　16名，　1979年　2名，　1981年　3名
1982年　3名，　1983年　4名，　1984年　5名
（不詳1名，1981年3名の内1名は1982年にもインタビューを受けている）
男　86名
女　53名
（不詳　1名）
日系　90名
非日系　50名

ユニークな点は，当然と言えば当然と思えるが，日系米人のみでなく白人（コーカジァン），それも強制収容に直接には関わっていなかった一般市民へのインタビューが多数含まれていることである。第二次大戦中10あったリロケーション・センターの内，最も名高いのは，最初のセンターでもあったマンザナーであろう（それに次ぐのが，合衆国政府への「不忠誠者」を中心に再組織されたツールレークかと思う）。マンザナー収容所が事前の予告もないまま建設された地元のオーエンス・ヴァレーの住民，殆どはそれ迄日系米人に関心すら抱いていなかった住民の反応をうかがうのに最適なインタビューが，無論インタビュイー各々の収容所・被収容者への意識や関わりにはかなりの深浅がありはするが，このCSUFのオーラルヒストリー・プログラムのコレクションの中にいくつも見出し得る。

ことオーラルヒストリーについては，最新のものが最善とは限らない。筆者も数次にわたり日米加三国でオーラルインクァイアリーを試みてきたが，年月と共に経験者が物理的に存在しなくなったり，知的に衰える例は多い。また，後年になって種々雑多な情報や知識が入ったものをあたかも自らの体験のように錯覚したり，自分の経験やその折の感覚を自分の人生のパースペクティヴの中にでなく歴史のパースペクティヴの中に過度に整理して配列したり「合理化」したりすることもある程度は避けられない。また，高齢者によく見られるが，信憑性を高めようという意識からか，年月日等ディテールに非常なこだわりを見せることもある。但し，インタビューはインタビュイーの話の矛盾を指摘することに目的がある訳ではないので，裏付けや訂正のないまま録音されていくことになる。更に，インタビュアーが白人であるか日系であるか，はたまた日本から来た研究者であるかにより，インタビューの内容にニュアンスの差が生じる可能性も高い。勿論，インタビュアーの側の視点や態度もインタビューの成否に影響を与える。完全にニュートラルなインタビュアーというものは存在しないが，時として自分の歴史理解やステレオタイプにとらわれて，インタビュイーを誘導したり，質問の内容を自主規制することもある。これは1991年に筆者が翻訳を刊行したRoger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986, 邦題『リロケーション—日系米人強制収容の証言』西北出版，の「訳者あとがき」にも記したことだが，一世の中には，トラウマチックな体験を過小評価しようとする心理メカニズムを見せる者もいれば，社会学的なレファレンス・グループをどこに求めるかによっては『キャンプ生活はヴァケーションじゃった』と表現する者もかなりいたが，一般にそうした発言は日本人研究者のインタビュアーには好まれない。

日系米人強制収容について言えば，「公民権運動」という全米的な分水嶺を越える前と後では，ターミノロジーさえ異なってくる。その一つが「ジャップ」という呼び方である。ジェシー・ギャレットとロナルド・ラーソンは1977年，第二次大戦中にオーエンス・ヴァレーの住民だった白人達（一人，夫妻の内の妻の方が中国系）へのインタビューを20抜き出して *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley* として刊行した。ところが，これは元々 *Jap Camp*，『ジャップの収容所』というタイトルであり，そのタイトルで広告もうたれていたものが，前年1976年に一部の日系市民からの強硬な申し入れにより変更されたものである。その顛末自体極めて興味深く，我が国におけるパラレルな問題と重ね合わせることも出来ようが，詳細の紹介は他の機会に譲ることとする。

合衆国の60年代は，公民権運動，ベトナム反戦運動，反公害運動の三つの運動で記憶されるであろうが，ジャップという言葉を用いるのは（ニップも同様）その時代背景の中では当然忌避されるようになっていた。それでも，例えばアグニュー・メリーランド州知事の1968年の副大統領選挙キャンペーンの途中での日系二世ジーン・オオイシに対する「ファット・ジャップ」発言のように，深刻な「失言」事件もおきている（詳しくは，当事者により，*In Search of Hiroshi*, 1988，翻訳は『引き裂かれたアイデンティティ』染矢清一郎訳，岩波書店，

1989年，の中に書かれている)。本稿で紹介するインタビューの中でも，少しの底意もなくジャップという表現が用いられている例が見受けられる。無論，底意のなさにこそ未だ意識が改められぬ証しがあると見ることも出来ようが。

II. 紹　　介

本稿では比較的短い4名の女性へのインタビューを紹介する。インタビュアーはまだ学生であったデヴィッド・ベルタニョーリ。スタッズ・ターケルのようにはいかないが，祖母のような年代の女性を相手にインタビューを進めている。4名中3名へのインタビューは，1973年7月14日に，残り1名へのそれは同年12月6日に行なわれている。

(1)メアリー・ジレスピーは，OHCによれば，1895年生まれ。1973年7月14日に，デヴィッド・J・ベルタニョーリによりインタビューを受けている。午後1時30分からのインタビューで，テープは15分のものが保管されている。以下，Bはインタビュアーのベルタニョーリ，Gはインタビュイーのジレスピーをさす。

B：マンザナー収容所はここから6マイル南に位置していたのですね。
G：ええほぼ6マイルです。
B：あなたは生涯ずっとここら辺にお住まいですか。
G：生涯の大部分です。1909年以降ずっとです。両親がここに入植いたしました。私たちはオハイオからここに来たのです。父の健康がすぐれなくて，ここへ来て入植しました。最初に姉がここへ来まして，その縁で私たちもここへ移る事になったのです。
B：あなたがこちらへ移られてからインディペンデンスに住んだ日系米人はいましたか。
G：いえ，いなかったと思います。当時中国人は大勢いました。
B：中国人ですか。それでは中国人に対してはどのような感じをお持ちでしたか。
G：彼らは大変良い人たちだと思います。
B：その事はあなたの日本人に対する意見にどのように影響したでしょうか。戦前には日本人についてどのような感じをお持ちでしたか。
G：そう，ただ私の言える事は，彼らがマンザナーへ入れられた時は，下にも置かぬもてなされ方だったという事くらいですわ，釣りもできたし，狩猟もできて。そういう人達は抑留されていた訳ですけど……かなり本気で荒れた時期もありまして，被収容者の一部がアメリカ国旗を破り捨てたり，軍属の車という車の上に飛び乗ってつぶしたりという騒ぎでしたけれど，彼らは後にツールレイクへ移されました。でも日本人は何でも一番良い物を貰っていました。あそこでは本当に大変良いもてなしをされていました。
B：彼らが釣りや狩猟をしていたと言われましたね。
G：ええ，収容所にあったクリークでです。
B：彼らはあの1マイル平方の所に抑留されていたのでしょう。
G：あそこには美しい樹がたくさんありました。そこに写真があります。〔彼女の家の壁に写真がかかっている〕
B：ええ，私もこのインディペンデンスへ来る途中であそこへ寄ってマンザナー収容所跡を見てきました。敷地を通ってクリークが流れていますね。
G：そうです。
B：それで日本人はあそこで釣りや狩猟をした訳ですね。
G：あの，かつてあの敷地はマンザナーという小さな町だったのです。八百屋やガレージや果物の缶詰を作っていた缶詰工場がありました。当時はあそこには果樹がたくさんありましたから。
B：管理当局がどのように日本人を扱ったかという点を詳しく話して頂けませんか。
G：彼らは下にも置かぬもてなしを受けてましたわ。
B：しかし監視もいた訳でしょう。
G：ええ勿論です。それに敷地の四隅には探照燈がありましたし，収容所から道路一つ隔てて空港もありまし

た。監視の兵士たちは収容所から少し南に住んでいました。

B：ご自身で収容所と何か接触をお持ちでしたか。

G：いいえ，一度も収容所には行きません。行きたくもありませんでしたから。

B：誰かあそこへ行った人を御存知でしたか。

G：ええ，軍属も多くあそこで働いていましたから。

B：何をしていたのですか。

G：電話局がありましたし，他にも軍属の働ける場所がいくつかありました。

B：お友だちが何かあなたに話されたことはありませんでしたか。日本人がどんなふうに……

G：いいえ，いいえ，私は収容所に行く気など毛頭ございませんでした。

B：そうだったのですか。

G：はい。その訳は私の身寄りが一人軍にいたからだと思います。海軍婦人予備部隊（Wanes）に姪がいましたの。軍に身寄りがいて，私たちの子供らがどんなめにあっているかなんていう事で色々な話を聞きましたら，ええもう私収容所になど行く気はさらさら起こりませんでした。

B：つまり，その頃，日系米人に対して何ら同情は持たれなかったという事ですか。

G：そうです。

B：真珠湾の前は日本人に対してどのような態度でいらっしゃいましたか。そもそも彼らの事を考えた事がおありでしたか。

G：いいえ，ありませんでした。

B：真珠湾攻撃に対するあなたの反応はどのようなものでしたか。

G：恐ろしいものでした。というのも，攻撃された時，息子さんが戦死し，奥さんも真珠湾にいらした友だちがこの町に一人おりましたから。

B：さて，同じ真珠湾の時に，ハワイやここカリフォルニアでは，ハワイの日本人が，軍隊が通れないように真珠湾に通ずる道を封鎖したとか，日系人の農民がパイロットに爆撃目標を指示するために穀物を矢の形に植えつけたとかいうおそるべき噂がたくさん新聞に現れました。これらの噂を何かお聞きになりましたか。

G：いいえ，聞いていません。

B：そういうような噂は広まっていなかったのですか。

G：ええ。

B：ここで新聞が手に入りますか。インディペンデンスに一つありますか。

G：ええ，週に一度発行のものがあります。

B：ほう，あるんですか。

G：インディペンデンスの新聞です。

B：それでその新聞はそんな噂は載せなかった。

G：ええ。

B：ご両親は収容所についてどのように感じていらしたのですか。

G：そうですね，父と母はその頃までに当地にはいなくなっていたんです。

B：なるほど。

G：1922年にここでひどい暴風がありまして，家が壊されてしまいました。屋根が飛んで，それから残りも吹き飛ばされてしまったんです。父は建て直すつもりだったんですけど，その晩焼けてしまいました。父は「魚及び狩猟鳥孵化場」で働いていたので，当局は父を孵化場の方へ引っ越しさせたのです。

B：収容所が設置された時，町の人たちは予めそれを知らされていましたか。

G：それは分かりませんが，あのバラックを建設するため大工や何やかや送り込まれました。

B：それらの人々が何故そこにいるのか御存知でしたか。

G：ええ，あのバラックを建てていたんです。

B：つまり，日系米人が到着する前に予告はあった訳ですね。

G：収容所が建ったんですが，あの人たち日本人にはいつもいらいらさせられました。何故なら私たちは配給を

受けなくてはならなくて，一定量のコーヒーや一定量の砂糖だけ与えられていたのに，彼らは何でも手に入っていたんですから。彼らはとてもいい待遇を受けていたんですよ……あらゆる種類の食糧を貰っていたけれど，ジャップはそういう風に暮らしたりしないんですよね。魚や米や彼ら独特の食べ物を食べていたんです。日本人はハムやらベーコンやら何でも貰っていて，収容所で働いていた人たちの言うには，彼らがそういう種類の食物に慣れていないもんで，ゴミ箱がもう一杯になってしまっていたんだそうです。彼らは一番良い物を貰っていて，本当に本当に良い待遇を受けてましたね。その事は言っておいてやらなくちゃ。

B：再配分計画が実施され出してから，多くの被収容者が収容所から出されました。その内には確かにインディペンデンスを通って行く人たちもいたと思うのですが。

G：ええ，彼らはよく戻って来ましたよ。夫は後に収容所敷地で郡のために働いたんです。当局はあそこで軍属たちの住んでいたすべての建物を，戦争から帰って来た兵士たちが住む所に困らないように明け渡しました。あそこへ入って住めたのは兵役から帰って来た兵士たちだけで，それから彼らの家族が，自分たちのちゃんとした住居が見つかるまでという事で入りました。その後バラックは郡に引き渡されたのです。郡はあそこからバラックと，軍属たち，つまり私たちと同じアメリカ人が住んでいた所をすべて接収しました。日本人の一部は時々戻って来ますわ，あそこには墓地が一つあるんですけど，夫の話してくれた所ではもう墓はないそうで，移されてしまったそうです。墓地では前は白い石が一つ立っていたんですが，収容所で死んだ人たちのものは移されました。でも，ええ，彼らはよく戻って来ていました。夫が言ってましたけど，時々そこを見に来るんです。

B：戦争が進むにつれて，あなたの日本人に対する態度はどのように変わりましたか。それともそもそも変わったのでしょうか。

G：私の態度は決して変わりませんでした。

B：変わらなかったのですか。

G：ええ。

B：日系米人部隊と，第二次世界大戦中の彼らのヨーロッパにおける大活躍を御存知ですか。

G：いいえ。

B：彼らはその戦争において最も多く勲章を受けた部隊だったのですが，これについてお聞きになった事はなかったですか。

G：そう，多分ここに写真のあるこの青年，彼が帰って来て家族に語ったような事を聞けば，貴方も同じ気持ちになると思うんですが……共感しづらくなるんですよね。

B：どういうものなのですか。

G：『日本の陥落』をお読みになった事はおありですか。

B：いいえ，ありません。

G：それでは，その話は，その本の中に書いてあります。

B：それについて詳しく説明して頂けませんか。

G：本は持っていたのですが，貸してあるんです。ウィリアム・クレイグによって書かれたものなのですが，写真の青年はジャップのいる島に飛び下りた時，そこへ入って行って，我々が戦争に勝ったのだとはったりをかけてやったのです。彼は私の甥でした。

B：甥御さんのその本に対する寄与の仕方を説明して頂けませんか。

G：いえいえ，彼が自分でやったのです。この本はすべて従軍した人々についての話です。この『日本の陥落』という本を読まれましたら，得られる所は大きいですわ。

B：分かりました。甥御さんは戦争についてどんな事をおっしゃっていましたか。太平洋戦線で戦われたのですか。

G：何ですって。

B：太平洋戦線で戦われたのですか，それとも欧州戦線だったのですか。

G：ドイツで戦いました。前線の背後にパラシュート降下したのです。朝鮮にも行きました。ヴェトナムにも2年いました。それに島を一つ我がアメリカ人のために解放したのです。その島を。でもそれはこの本を読め

ば分かります。ビショップでは高校でこれを使いました。『日本の陥落』というタイトルで，ここから多くの情報が得られますし，彼の写真も乗っています。甥の名はシングローブです。

B：ええ，分かりました。マンザナーで暴動が起きた時，被収容者二人が殺された時は何をお考えになりましたか。

G：当局はマンザナーをとても大人しくさせていました。

B：ほう，そうなのですか。

G：当局は彼らを皆あそこから放り出してしまって，騒ぎを鎮めたのです。

B：銃声や何かは聞こえましたか。

G：いえいえ，収容所はここから6マイル離れてますから。

B：そうでした。6マイル離れているんでした。しかし地元紙には出たでしょう。

G：出たか出なかったか覚えていません。覚えているのは当時当局が彼らを収容所から追い出した事です。

B：お差し支えなければ第二次大戦中おいくつでしたでしょう。

G：現在78才です。

B：そうするとその頃は40才前後ですね。幼な子ではなかったのですね。(笑い)

G：ええ，私は二度結婚しましたが，少し前に夫を失くしたばかりなんです。

B：それはお気の毒に。

G：2月に，いらっしゃる途中にあったブレディーの食堂近くで死にました……私たちは養蜂の仕事をやっていたんですが……

B：蜜蜂ですか。

G：ええ蜜を集めていたんです。夫はロサンゼルスへ買い出しに行きまして……こんな話お聞きになりたくありませんわね。

B：いえ，いえ，お続け下さい。

G：夫はロサンゼルスから砂糖を買って帰って来て，あそこで死んだんです。

B：交通事故ですか。

G：トラック，夫は自分のトラックに乗っていき，ブレディーの店へ寄って食べる物を買い，出てきた所をそのトラックに轢かれまして，両足と骨盤を骨折し，体の中も傷つけました。リッジクレストの病院に運ばれまして，私が駆けつけて20分位してから死にました。夫は，郡がマンザナーを接収した時にあそこの建物の処理にあたった一人でした。

B：それは日本人の去った後ですね。

G：そう，彼らは去りました。それから郡があそこを接収して，それから売り立てそして帰って行きました……ほら，あの土地はロサンゼルス市に属しているんですわ。

B：ほう，そうですか！

G：ええそうですとも，あそこのすべての土地，ここの大部分の土地は……

B：ロサンゼルス市に属しているのですね。

G：ええロサンゼルス水利エネルギー局にです。

B：興味深いお話ですね。

G：私たちの内で自分の家を持っているものはほんの一握りなんです。今は私はここに自分の家を持っていますけれど，この辺りの家の大部分は水利エネルギー局に属するんです。

B：それじゃあ貸し家になっているんですか。

G：政府が収容所のためにマンザナーの土地を貸しました。それからそこは水利エネルギー局に戻りまして，建物も皆返還されました。それから競り売りでそれらを売ってしまって，あそこの建物を移したのです。

B：収容所を運営していたのは連邦政府でしたよね。

G：ええ，ええ，そうです。彼らがやって来て，ミスター・ラルフ・メリット氏が所長だったようですわ。

B：さて，この収容所というのは，それ自体経済的な影響を町に与えましたよね。

G：さあ，ジャップは決して外へ出ませんでしたし，あそこに雇われていた人の大部分は地元も地元，町でなく

周辺の人でしたから。

B：日系米人の事ではないのです。収容所を建て，そこで働いていた人たちの事です。彼らはインディペンデンスやローンパインで暮らしたはずです。

G：水利エネルギー局が，そういう事全部をするために人を送り込みました。

B：しかし彼らはここで食べたり寝たりしたはずです。

G：ええ，確かに，彼らは町に来ましたわ。

B：従って町はいくつかの点で経済的利益を得た訳です。

G：ええ，いくつかの点ではね。

B：しかし，全体として，あなたは当時日系米人を好きではいらっしゃらなかった。

G：ええ，正直に言います。そういう風に感じてしまったんです……良い人たちだって沢山いたかも知れないとは思います。ロサンゼルスに住んでいた少年を一人私たち識っていたのですが，彼は喜んで入所しました。多くの人たちが喜んで入所しましたけど，それというのも彼らは中では守られていたからです。私たち誰にでも，良い人と悪い人がいますからね。

B：インタビューを引き受けて下さって大変有り難かったと思います。

G：ええ，私は引き受けて嬉しかったです。マンザナーの建物は一つを除いて無くなったんですよね。あそこに残っている大きな建物はレクリエーションホールでした。今では郡が使用しています。ガレージになっていまして，トラックがそこら中に何台も置かれています。郡所有のガレージで，そこでトラックの修理をするんです。

B：それが彼らのレクリエーションホールだったのですね。

G：ええ，ジャップのためのです。

B：彼らは乱痴気騒ぎか何かやったんですか。

G：存じません。行った事がないから……

B：それではご協力大変有り難うございました。

G：ええ，でも収容所で働いていた人を誰か見つけられればもっと話をしてくれるでしょう。でも帰られたらあの本を手に入れられればお役に立ちますわ。『日本の陥落』という題で，たくさんの事，すべてを語っていて，ウィリアム・クレイグの手になるものです。インディペンデンスの図書館にもあるのは分かっていますが。何しろ私があれを初めて手にしたのはあそこでしたから。それからあっちのピクウィック書店に注文を出して自分自身の本を手に入れたんです。私もそれを持っていたかったし，甥の写真が入ってますから。そこには，甥がそこへ行った時，島の若者たちがパラシュートからアメリカ国旗を作った顛末や何かがすべて書いてあります。それから彼らは隠れまして，ユニフォームも記章も取ってしまって，後で彼に贈り物にするためにそれを隠しておきました。何故ならいつかは彼がやって来て彼らを解放してくれるだろうと願っていたからです。

B：それは大変面白いお話ですね。もう一度，カリフォルニア州立大学フラートン校日系米人オーラルヒストリー・プロジェクトになり代わって厚くお礼申し上げます。

(2)匿名となっているが，OHCによれば1920年頃の生まれの女性。デヴィッド・J・ベルタニョーリによって，1973年7月14日午後3時からインタビューを受けた。テープは20分のものが保管されている。以下，Bはインタビュアーのベルタニョーリ，Aはインタビュイー。なお，インタビューには，母親が同席している。

B：インディペンデンスにはどれ位お住まいですか。

A：そう，ほぼ47年になります。

Aの母：1924年以来です。

B：戦前に誰か日系米人の友人はいらっしゃいましたか。

A：いいえ。

B：日系米人とそもそも何らかの接触はございましたか。

A：いいえ。
B：彼らに対して何ら意見をお持ちではなかった訳ですね。他のマイノリティーについてはどうでしょう。
A：ええ，インディアンの子供たちと同じ学校へ通いました。
B：彼らをどうお思いになりましたか。
A：私たちは仲良くやって行きましたよ。
B：それはこのインディペンデンスでの事ですか。
A：そうです。
B：それではそれはパイユート族の人たちですね。
A：その通りです。
B：当時は公民権運動というようなものはなかった訳ですが，彼らはどのように扱われていたでしょう。
A：全く私たちと同様に扱われていました。
B：全く他のだれもと同じようにですか，それは面白い。それで戦争中はおいくつでしたでしょう。
A：22歳位でした。
B：その時までにどれ位の教育を受けていらっしゃいましたか。
A：高校を卒えていました。
B：それは町ではかなり普通のことだったのですか。同じ歳の人たちの大部分は高校の教育を受けていたのですか。
A：いく人かは幸運にも大学まで行きました。
B：彼らはどこへ行ったのですか。
A：ロサンゼルス方面です。
B：普通は彼らは当地へ帰って来ていましたか。
A：いいえ。
B：収容所を建てるという事前の通告はなされたのでしょうね。
A：そのはずです。ところで義父は配管工だったのですが，1900年代の初めにホイッティアからやって来てマンザナーの水利施設を敷設し，そこへ人々が農園を設けました。義父はマンザナーへ仕事に行って鉛管やらパイプやらを敷設したんです。
B：目と鼻の先に1万人の日本人が置かれるとお聞きになった時のあなた方の最初の反応はどのようなものでしたか。
A：私たち何も反応はなかったと思います。
B：それについて何も考えなかったのですか。
A：ええ。
B：それでは，真珠湾についてはどうでしょう。あれが起こった時何をお考えになりましたか。
A：正確には何が起こったのか，という事が浸透するまでにほぼ2週間かかったと思います。あの頃私たちは多少ともここで孤立していましたから。勿論ラジオはありましたけど，今のようにみんなが旅をする事はなかったんです。テレビなんて無論ありません。私はあそこの小さな家に住んでいたんですが，隣の御婦人，私とは母子程違うお歳でしたけど，その方がやってきて私たちに真珠湾が爆撃されたと教えてくれたんです。それは悲劇的なことでしたけれど，2週間位の間はそんなにピンと来ませんでした。それから青年たちが皆出征するんだという現実がやって来たんです。
B：では町中の人々からは初めは反応はなかったという訳ですか。
A：あったような覚えがないのです。
B：青年たちはたくさん町を出て軍に入ったのですか。
A：ええ，大部分は戦争前の徴兵によってすでに従軍していたのです。
B：ああ，そうですね。収容所そのものは町の経済にどのように影響したのですか。いくらか梃子入れにはなったはずですが。
A：ええ，なりましたとも。とりわけ労働者たちのお蔭ですね。当局があそこの収容所で働くために労働者たち

を送り込んだのは御存知の通りです。それから経済は順調でした。

B：その事は日系米人にたいする貴方の感情に何か影響しましたか。

A：いいえ，当時は影響しませんでした。

B：国が日本と戦っている最中に1万人の日本人と隣り合わせに住んでいるという事についてどうお感じでしたか。

A：いえ，それは別に気になる事ではなかったと思います。

B：当時日系米人に対する反感のようなものをお感じになりましたか。

A：いいえ，当時は感じませんでした。

B：彼らは誤った扱いを受けているとお感じになりましたか。ああいう収容所を設置する事は正しくないように思えましたか。

A：いいえ，もし私たちが彼らの国にいたなら同じ事になっただろうと感じましたから。

B：しかしあの人たちはアメリカ市民だったのですよ。それはお分かりだったのでしょう。日本人ばかりでなく，市民権を持つ者が抑留されていたのです。

A：ええ，でももし私たちが日本に住んでいて向こうの市民権を持っていたとしても，やっぱり抑留されただろうという気がするんです。

B：彼らがどのような扱いを受けていたかという事のニュースが何か外へ流れていましたか。彼らが荒っぽい扱いを受けている，ないしは囚人のような扱いを受けているという事はあったでしょうか。

A：いいえ，囚人のように扱われてはいませんでした。

B：彼らの食事はどんなだったのでしょう，どのように食事をとってっていたのでしょう。

A：共同食堂があったのです。

B：軍か軍属が食物を運び入れたのですか，それとも日本人が自分たち自身の食物を育てたのですか。

A：そうですね，彼らはしばらくしてから自分たちの菜園を持ったのです。ずっと前にはマンザナーは果樹園だったのですから。

B：ええリンゴ園でしたね。それは耳にしております。

A：ええ，あそこにはあらゆる種類の果樹があって日本人が生き返らせたのです。

B：その頃樹々は未だあったのですか。

A：はい。それに一部は今日でもまだ残っています。夫があそこへ警備員として働きに行くようになってから，夫は日本人とは全くうまくやっていけるようになりました。

B：ご主人は彼らの事を何か言っていましたか。民族としてですが。

A：ええ，主人は彼らもみんなと全く同じ人たちだと言っていました。

B：彼らの日本的な態度とか文化についてはどうでしょう。アメリカ社会の他の人々とは彼らは違っていましたでしょうか。

A：その事は言っていませんでした。

B：さて，ご主人は警備員でいらした。仕事中はどんな種類の武器を携帯していらしたのですか。

A：主人は仕事中武器を携帯していなかったと思います。

B：正門の警備員でいらしたのですか。

A：いいえ，所内保安係の方でした。

B：それをもう少し詳しく説明して頂けますか。

A：その，それがどんな仕事だったかは本当に正しくは覚えていないんですの。何しろ遠い昔の話ですから。

B：彼はいわゆる局外にいた訳ではないのですね。収容所の中自体にいらしたのですね。

A：ええ，そうなんです。

B：あそこには警備員は沢山おりましたか。

A：そう多くはありませんでした。

B：どれ位ですか，10人から20人の間位ですか。

A：憲兵がいましたので。

B：ああ，ご主人は軍属でいらしたのでしたね。憲兵がどの位の数いたかおおまかにでもお分かりになりませんか。

A：分からないのですが，たくさんいました。みんなブルックリンから来た青年たちでした。ブルックリンでつくったソフトボールチームがありましたので，彼らの訛りを覚えていますの。

B：憲兵は武器を携帯していたんですか。

A：分かりません。私は収容所に入ったことがないんです。

B：憲兵が武器を携帯している写真を2枚見たことがあるんですが。

A：そう，でも私は収容所自体には一度も入った事がないんです。私が車を使っている時は門の所で主人を乗せましたんで。

B：ご主人は憲兵に対して反感のようなものを表明した事がありましたか，それとも彼らの誰かととりわけ親しい友人になられたりしましたか。

A：二人の人たちとお友達になりましたけれど，彼らの名前は覚えておりません。

B：それはご主人と同じ位の歳の人たちでしたか。彼らは何か共通の興味を持っていたのですか。それとも単に一緒に働いていたからですか。

A：事務所で一緒に働いていたんだと思いますよ。

B：ところで，あそこでは暴動が起きましたよね。

A：暴動の事は何も知らないんです。主人は暴動の後で働きに行きましたので。

B：ご主人はどれ位の間あそこで働いていらしたのですか。

A：覚えておりません。お分かりと思いますけど，人の一生には言ってみれば空白となってしまう部分があるものですわ。

B：あなたの今日の日系米人に関する感情はどんなものでしょう。彼らは他の誰彼とは異なっているとお思いになりますか。

A：それについては特に何も感じません。

B：彼らは皆庭師だというようにお考えですか。

A：いいえ，とんでもない。ローンパインには日本人の医者だっているんですよ。

B：町の住民は他の医者と同様に彼を贔屓にしていますか。

A：ええ，していますとも。実際私の娘がここで娘の夫が朝鮮から帰って来るのを待っていた時など，彼女はこの医者の方が腕が良いと言って選んだぐらいなんですよ。また，うちの主人も歯を抜かなくてはいけなかった等。この町の歯医者には行けませんでして，今まで一番楽に抜いて貰ったのは収容所の日本人の歯医者の所だと言っておりました。

B：収容所には日本人自身の歯医者がいたのですか。

A：ええそうなんです。彼らは自分たちの歯科診察所を持っていたんです。歯科診察所は覚えていますし，主人は何よりもその事について良く話してくれました。あそこには専門職が沢山いたんです。

B：それは皆日系米人だったのですか。

A：そうです。

B：彼らが広範囲のレクリエーションのプログラムを持っていた事は分かっています。野球のチームを編成して町のチームと試合をやるというような事はあったでしょうか。

A：なかったと思います。

B：不躾な質問ですが，収容所は，マイノリティー一般に対してのあなたの感情に影響を与えるという事はあったでしょうか。

A：いいえ，全く。当時幼い娘がいまして，その子にかかり切りで他の事など気に留まらなかったんです。兄と夫が従軍してからはもう少し関心を持つようになりました。それに町中のどこにも若い男なんて一人も見つからなくなってしまったんです。

B：欧州戦線での日系米人連隊は大変多く勲章を受けた部隊でした。

A：ええ，丁度その部隊に兄弟を持っている友人がいたんです。彼はオーストラリアに駐屯していましたけど。

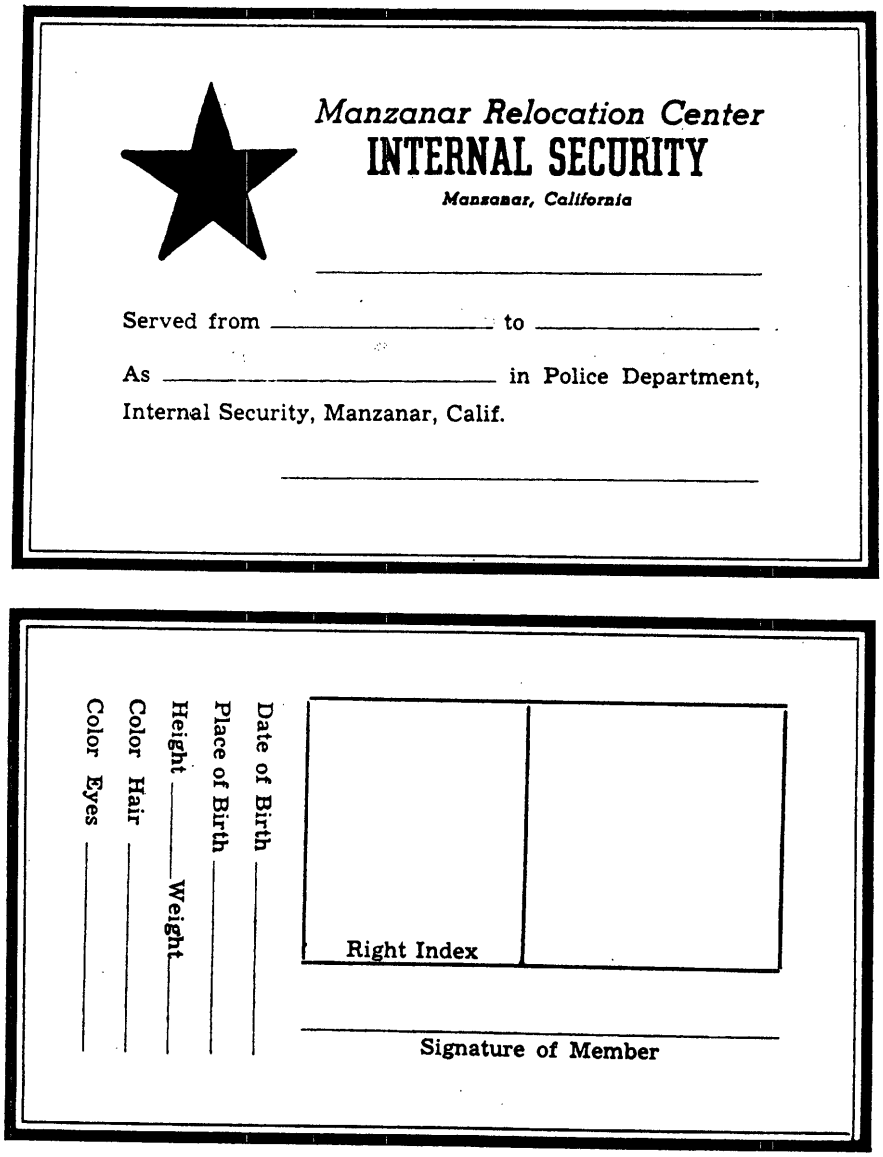

Fig. 1 マンザナー収容所の警官(警備員)の退任時に与えられたIDカード

B：この町において442連隊の活躍を聞いた事がおありですか。
A：ここではありません。
B：ほう，町の住民は彼らについて全く耳にしなかった訳ですか。
A：耳にしたかも知れません。私がここに住んでいなかったんです。
B：おや，あなたはその時ここにいらっしゃらなかったんですか。
A：それを耳にした時はいませんでした。
B：さて，ご主人は後になってツールレーク収容所の警備員におなりになったんですよね。
A：そうです，あれは問題を起こす人たちが連れて行かれる収容所の一つでした。マンザナーで問題を起こす人がいると，いやポストンでもその他のどこの収容所ででもですけど，一人二人でも，少々数が多くてもそのグループをつかまえてツールレークへ送ったのです。ツールレークでも，問題のない人たちのための区域が一つありました。その人たちは本当に気持ちのよい人たちで問題を起こす事はありませんでした。たとえば

ボーイフレンドが日本人部隊に入っている女の子がいました。本当にとても気持ちの良い子でしたけれど，一方であの問題を起こす男たちがいて，朝の4時半とか5時というのに行進をやったり叫び声を上げたりして他人を起こすんですの。

B：行進ですって。

A：ええ，何か軍隊のようなものを作って，行進したり，ドラムを叩いたりするんです。ある朝彼らは皆事務所に出頭して来て，アメリカの市民権を返上することに決めました。そういう訳で，実際色々な書類手続きをした後で彼らは市民権返上に署名する事ができた訳です。あの人たちは朝日の描かれたTシャツを着ていました。一つ他の事より良く覚えている事件があります。私がツールレークから町へ出てそれから戻りますと，収容所全体を陰気なムードが覆っているんです。それで分かったのは，軍に入隊していた青年が一人，負傷して海外から戻って来た所だったんです。彼は日本軍と戦って来たんですから，ツールレークの収容所は彼の戻る所じゃなかったんです。

B：彼は日系米人兵士だったのですか。

A：いいえ，アメリカ人の青年で，門の所で歩哨勤務に当たったのです。彼らが戻って来た時，その中の日本人一人がこの軍にいた青年に向かっていくみたいに突進したんで，青年が直ちに彼を撃ったのです。それで日本人は座り込みストライキをして仕事をしなかったんです。

B：彼は日本人を殺したのですか。

A：そうです。

B：ツールレークにはどれ位の日本人がいたか御存知ですか。

A：思い出せません。1万8000から2万人はいたはずです。

B：マンザナーは1マイル平方でした。ツールレークは同じ位でしたか，もっと大きかったですか

A：分かりません。

B：1万8000人収容できたんだからもっと大きかったに違いないですね。

A：そうだったに違いないと思います。広大な収容所でしたから。しょっちゅう彼らは問題を起こす事に決めて，当局は手元の全兵力を投入しなくてはなりませんでした。私たちがあそこへ行く前に恐ろしい暴動が一つあったんです。彼らが全事務職員を一つの建物に押し込めて周りに藁を並べ，火をつけようとした時に警官のチーフが逃げ出すのに成功しました。彼はできるだけ速く軍の駐屯所へ走って行ったので，助けを呼ぶことができました。事務所の建物から電話はできなかったんですって。

B：警官のチーフは日系人だったのですか。

A：いいえ，白人でした。

B：収容所の警察力はどれ位大きなものでしたか。

A：当時の警察力がどれ位だったのかは存じません。あの恐ろしい暴動が起きるまでは大して大きなものではありませんでした。そういう事は皆新聞に出ましたわ。

B：正確にはツールレークにはいついらしていたのですか。

A：ツールレークには1943年におりました。

B：そこで何をしていらしたのですか。

A：夫が警備員だったのです。

B：つまりマンザナーでもツールレークでも警備員でいらしたわけですね。ツールレークでも所内保安係にいらしたのですか。

A：そうです。

B：そこでは彼は武器を携帯していらしたのですか。

A：ええ，45口径を持っておりました。

B：ほう，そうでしたか。それで，その時でもご主人はやはり軍属でいらした訳ですね。そこでは所内保安係に何人位いたか覚えていらっしゃいますか。

A：いいえ。でも大勢いました。覚えているのは，当局が私たちと警官のためにバラックからアパートを作ってくれまして，警官は皆同じグループとしてまとまっていなければならず，私たちのように子供連れの者でも

皆同じグループとして一緒にいなければならなかったからなんです。私たちは事務職員の住んでいる所に住めず，他の場所にも住めなかったんです。

B：バラックの中で割り当てられた部屋はどれ位の大きさでしたか。

A：寝室が二つと，居間と食堂のつながった部屋，それに浴室と台所でした。

B：それではかなり広かったのですね。

A：ええ，大変住み良いアパートでした。

Aの母：被収容者は素敵な家具を持っていましたのよ。

A：それは信じて頂かなくちゃ。当局がマンザナーで競り売りに出した時私も一つ買ったんです。収容所まで行って家具を一つ購入したんです。

B：それで，ツールレークの町では日本人を怖がっていたでしょうか。

A：住民は軍属を嫌っていましたし，日本人も嫌っていました。あそこで働く人間をも嫌っていたんです。町の住民は私たちが好きではなかった。でも私たちはすべての買い物をあそこでしていたんです。

B：つまり収容所で働いていた人たちまでが嫌われていたんですか。

A：そうなんです。

B：それは興味深い事ですね。あなたがあそこにいられた間に彼らの態度は変化しましたか。

A：私たちのいた間には変わりませんでした。

B：住民は何かするような事，何か大っぴらに日本人に対して嫌がらせをするような事はありましたか。たとえばそばを歩いて彼らに石を投げつけるとかそんな事ですが。

A：いえ，それはありません。収容所は町から離れていましたから。

B：どれ位ですか。

A：収容所は町から7マイルの所でした。フェンスで囲われていて，私たち自身出る事もできませんでした。

B：あなた方はツールレークの収容所敷地の一部にいたのですか。それとも完全にそこからは切り離されていたのですか。

A：説明しにくいんですの。フェンスははっきりと収容所を取り巻いていまして，白人労働者はまた日本人からフェンスで隔離されていたんです。でも私たちも皆フェンスで囲い込まれていまして，入るには身分証明書が必要でした。ただそれから彼ら〔日本人〕は賭博場を設けまして，当然ながら当局はそれを止めさせなければならなかったのです。

B：ご主人はそれをなさった訳ですか。彼は彼らと個人的に問題のあった事はございましたか。

A：いいえ。戦争が終わってから又会ったなら，自分は野菜の商売に戻るから，主人を事務所の支配人にしても良いと言ってくれた人は一人います。二人は再会しませんでした。その日本人は大変大きな人でした。6フィートはあったんじゃないかと思います。彼はどうなったんだろうとよく思ったものです。

B：従ってご主人はあそこでもマンザナーと同様にお友達がいらしたのですね。

A：彼はどこへ行っても友達ができました。あたり前かも知れませんけどツールレークはかつての湖の底に建てられていたんですよね，それで日本人は小さくて可愛い貝殻を見つけました。大変芸術的な人たちなんですね，彼らはその小さな貝殻を拾ってきれいにして，それから色々な色を塗って装身具にしました。イヤリングやピンやネックレスを作って売ったんです。

B：彼らはそういうものを誰に売ったんですか。

A：そう，たとえば私などもいくつか買いましたわ。

B：町の住民もそれを買いましたか。

A：いえ，ただ収容所の中にいた私たちだけです。私たちはあそこでレクリエーションもありましたし，ツールレークへ行く理由はただ一つ野菜を買いに行くためでした。

B：あなた方は各々のアパートに自分の台所をお持ちだったのですね。

A：ええ勿論。それに白人の子弟のための小学校もありましたし，日本人子弟も又自分の学校を持っていました。

B：白人の学校の教師には一人も日系米人はいなかったんでしょう。

A：ええ。
B：日本人の学校では白人の教師はいたんですか。
A：知りません。私たちは収容所に入るのは許可されなかったんです。
B：軍属は日本人側には入れなかった。そして彼らの方は無論あなた方の側には入れなかったんでしょうね。
A：住宅建築や修理に従事したり，ストーヴの油を配達したり，小さな店を出したりする日本人は私たちのがわに入るのを許可されていました。
B：彼らがあなた方の区画に店を持っていたんですか。
A：ええ，そうなんです。
B：そこであの装身具を売っていた訳ですか。
A：そうです。
B：装身具以外何かそこで売っていましたか。
A：覚えている限りそれだけです。
B：装身具は貝殻だけからできていたのですか，小さな石もあったのですか。
A：いいえ，貝殻だけです。私もまだイヤリングを持っていると思います。
B：カリフォルニア州立大学フラートン校日系米人オーラルヒストリー・プロジェクトになり代わりまして，インタヴューへのご協力を感謝致します。
A：いいえ，どういたしまして。

(3) キャサリン・クレイターは，OHC によれば，1902 年生まれ。1973 年 7 月 14 日午後 4 時半からデヴィッド・ベルタニョーリによってインタビューを受けた。テープは 35 分のものが保管されている。インタビューにはキャサリンの夫のアレックス・クレイターが同席している。

K：さて，クレイターさん，あなたはマンザナーと戦時中の日系米人の収監について何か調査をなさっている訳ですね。
K：ええ，かなりしてきました。
B：それについて話して頂けませんか。
K：はい，私はインヨー郡についての一連の点描や回想録を書く事にずっと関心を抱いております。タイトルは『ハイシエラの彼方，インヨー郡の思い出』とつけようかと思っているんです。
B：その題には何か特に理由があるのですか。
K：いえ，私どもは丁度ハイシエラの山陰にいるものですから。
B：ここは東側の斜面になる訳ですか。
K：ええ，ここは東側です。ここに住んで参りました年月の間に私の興味を魅いた出来事を取り上げて来たのですが，その一つが無論マンザナーだった訳です。私どもはマンザナーが開設された時にここに住んでおりましたから。真珠湾の爆撃の後，夫はメインストリートに八百屋を持っておりましたが，突然あの知らない人たちが店にやって来だしたんです。私どもはあの頃はオーウェンスヴァレーの誰も彼も知っていると思っていましたのに。そしてあの人々はほんとにがさつで，ほんとに魅力のない人たちでした。それで結局分かったのは，彼らがマンザナーにバラックを建てるために連れて来られた人たちだったっていう事です。マンザナーは，御存知のように 1900 年頃に始められたリンゴを栽培する地域だったんです。ですが市が土地を買収してから，樹木は引き抜かれて，全体にヤマヨモギのおいしげる状態に戻ってしまいました。ですから当時マンザナーには何もなくて，日本人がそこへ収監されるからと言うのであの人たちがバラックを建てていた訳です。それで私は大変仰天しましたし，あの頃私は思っている事を口に出す質でしたから，店にやって来た知らない人たちに言ったんです。これは許せない事だと思うって。でもあまりちゃんとした答えはもらえませんでした。実の所彼らは大変愛想がなかったので，主人は私に対し，黙っていて，この事についてはもう何も言わない方が良いと言いました。それで私もあまりその事については言いませんでした。とにかくバラックは建て終わりまして，それでマンザナの配置は御存知ですよね。

B：ええ多少は。

K：収容所は有刺鉄線で囲いこまれていまして，四隅には塔が一つづつありました。あれは転住収容所なんてものじゃない，強制収容所でした。そうなんです。彼らはあそこの囚人でした。去る事も周りを動き回る事もまるでできなかった。そして，あなたがおっしゃったように一時は1万人も，数は変動しましたけれど，一時は1万人もの人がいて，それはインヨー郡全体の人口を越えていたんです。インディペンデンスには恐ろしさで頭がおかしくなった人たちがいました。日本人がマンザナーを破って出てきて，私たちは皆ベッドの中で殺されるって言うんです。日本人がマンザナーにいた間中ベッドの下に銃を置いて寝ていた人を少なくとも二人は私どもも知っております。私どもは店を持っていた訳ですが，ある時一人の男，町の尊敬されている市民の一人が主人に電話をかけて来て言うんです。「あのジャップの奴らには何一つ売らんようにしておいた方があんたの身のためだぞ」って。

B：ああご主人は当時ここで商人をなさっていたのですね。

K：ええ，私どもは八百屋の店を持っておりました。それで主人は，「でもどっちにしても彼らには何も売りようがないんですよ。日本人はあそこに囚われになっていて，やって来て何か買ったりはできないんですから」と答えますと，この人は，「うむ，儂はただ警告しておるだけだ。あんたの身のためなんだからな」と言ったんです。

B：それは市の役人だったのですか，それとも単に尊敬されている市民だったのですか。

K：いえ，彼が誰だったかという事は言わない方が良いと思います。ただ大変地位のある方でした。その事が当地周辺の態度を表しているんです。

B：それが町の人一般の感情だったのですか。

K：ええ多くの人の感情でした。申しましたように私は思った事を何でも口にする質でしたけれど，保身から思っている事を表に出さないでいた人も沢山いたという気がしますね。ひどく反日的な人もいましたから，そういう人は声高に喋りましたけど，私と同じように感じていて，ただそう口に出そうとしなかった人もいるという感じを持ったんです。行政命令九〇六六の背景だとか，彼らがどんな風にやって来たかなどはすっかり御存知ですわね。日本人の大部分はバスで来ましたが，中には自分の車を運転して来た人もあったのです。

B：ほう，そうだったのですか。

K：でもマンザナーまで自分の車を運転して来た場合，彼らは荷物や何かだけ取り出して，車は取り上げられ，つぶされてスクラップになってゴミ捨て場へ捨てられたんです。

B：彼らはその補償金を払われましたか，払われませんでしたか。

K：何も払われませんでした。

B：ただ失っただけだったのですね。

K：ただ失っただけでした。私どもはあるクリスマスに，彼らが行事を催してオーウェンス・ヴァレーの住民を招待してくれたのでマンザナーへ出かけました。ここから高速道路395号線でインディペンデンスへ車で行かれた時，収容所跡の小さな公会堂をご覧になりましたでしょう。

B：現在は二棟の守衛所が残っているだけです。

K：守衛所二棟に公会堂もまだ建っていますわ。公会堂はあの今は郡のガレージになっている緑の建物です。

B：ああ分かりました。レクリエーションセンターですね。

K：すべて大変小さいものでした。ベンチがあったのですが，私にさえ小さかったのです。舞台も低くて，全体が……

B：軍がこのレクリエーションセンターを彼らに作ってやったのですか。

K：政府が作ったのです。

B：催しを見たとおっしゃいましたが，収容所そのものに実際に入られたのですか。

K：入りました。

B：このレクリエーションホールは収容所の真ん中にあったのですか。

K：そうです。その頃すべての集会が行われた彼らの公会堂です。

B：グループとしてお入りになったのですか，それとも，単にそのまま門の所へいらしたのですか。

K：ええ，私どもはひとりひとり行きましたけれど，面接を受けねばなりませんでした。

B：ほう，そうだったのですか。

K：ええそうなんです。

B：入るための身分証明証のようなものを貰ったのですか。

K：面接なしには入れませんでした。入構証のようなものをくれたかどうかは覚えていません。

Kの夫：入ってからくれたんですよ。でも面接は実に入念にやられました。

K：いずれにせよ，その侭入っていくことはできませんでした。入る前に二棟の守衛所を通らねばなりませんでした。

B：たくさんの白人がそうしていたのですか。

K：ええ勿論です。その中に住んでいた白人もいたのですから，つまり職員ですよ。

B：はい。

K：実は昨日図書館で働いている女の人と話したのですが，彼女の御主人は収容所の中で働いていたのです。正確に何をしていたのかは思い出せませんが，彼らはあそこに住んでいました。日本人の少女の多くが大変美しいのは勿論御存知ですわね。彼女は自分の大変気に入っていたある少女の事を話したんですが，その少女はマンザナーから徴兵されていた少年の一人と婚約していたのです。

B：収容所から徴兵されたんですか。

K：少女は収容所の中にいて彼の方は外にいました。彼女の言いますに，少女は有刺鉄線のフェンスの側に立って鉄線につかまりながら彼にさよならを言い，鉄線の針が手にくいこんでいる事にも気がつかなかったそうです。彼が去ってから彼女が，「ヘレン，どうしてあなたは平気なの」と言いますと，少女は答えました。「あの，私たちは東洋人ですから，心の中で血を流してるんです」少女は彼にさよならを言った時全く落ち着いて，感情を外に表さなかったのですが，そうして有刺鉄線の側に佇んで針が手にくいこむのも気づかずにいたんです。彼は戻って来ましたので彼らは幸福な結婚式をあげ，今でも幸福に暮らしています。

B：第二次世界大戦中の日系米人連隊四四二連隊は極めて有名な部隊でした。戦争中最も多くの勲章を受けた部隊でした。そうですよね。

K：その通りです。

B：このインディペンデンスで私の話した他の人々は戦争中彼らの話を一度も聞かなかったようです。それで，あなた方はお聞きになりましたか。

K：ええ勿論です！

B：彼らがああして勲章を受け始めた後で町の人たちは日系米人たちに対して少しはより好意的になったように思いますか。

K：分かりません。本当に分からないんです。あれは本当にこっそりしか話されない事柄でしたから。ふり返って見ますと，前にも申しましたように人々は全く沈黙していて思っている事も話さず，何ら反応というようなものは得られなかったのです。

B：なるほど。

K：私の姉はロサンゼルス市立大学の商業科の主任をしていました。タイプとか速記とか簿記とか事務所管理などの授業が教えられていた所ですが，そこでの彼女の秘書は日本人の女の子でした。その家族をマンザナーへ移すという事が当局から通告された時，彼女は一週間ただ泣き続けたと妹は言っています。妹が彼女に，「それで，他の日本人はこれをどう感じているの」と尋ねますと，少女は，「私たちは他の日本人を知らないんです」と答えました。一家は自分たちだけで住み，小さな店，小さな事業を持っていて，私たちがそうであると同じくらい日本人には無縁だったのです。とにかく，そういう訳で，妹が私たちに会いに来た時，私たちはマンザナーへこの少女に面会に行きました。勿論例によって面倒な手続きがありました。彼女は住んでいたバラックから連れて来られなければならなかったのですが，ヘレンを見ると泣き出したのです。彼女はただ「まあ，マッケルヴィーさん，マッケルヴィーさん，マッケルヴィーさん」としか言う事ができませんでした。ただそれだけを何度も繰り返したのです。ヘレンが「泣くのはおやめなさい。これももうじき終

わって，あなたも又戻って来られるわよ」と言うと，彼女は答えて，「ええ，でももう決して元のようには戻らないでしょう。私はただのジャップでしかあり得ないのです」

彼らがどのように収容所を改善したか御存知ですか。日本人はご承知のように美しいものが好きです。身の周りに美しいものがないと気が済まないのです。昨日話しましたその女性の言いますには，彼女がローンパインへ出かける時には，彼らは種を買って来てくれるようよく頼んだそうで，それで小さな庭に植えつけたのです。私どもは実にたくさんの彼らの小さな庭を巡り歩きました。本当に美しかったですわ。収容所のすぐ南にいつも干上がっている小さなクリークがありましたが，彼らはあれを東洋風の庭園みたいにしまして，本当に美しいものでした。そして，勿論収容所が放棄された時，すべては駄目になってしまいました。でも彼らは諦めなかったのですわ。彼らは収監されていても実にきちんと体裁を作っておりましたが，心の内ではそういう風に感じていたのではなかったのです。

B：彼らの誰かと個人的にお知り合いでしたか。

K：いいえ，それは許されませんでした。実際一人一人を知る方法は全くなかったんですよ。本当に知り合いようがなかったんです。

B：ただ表面的な接触があっただけだったのですね。

K：彼らは囚人でしたから。もう一つ面白い事がありますわ。デスヴァレー・フォーティーナイナーズの事をお聞き及びですか。

B：はい。

K：デスヴァレー・フォーティーナイナーズにいた私どもの友人の一人，ラルフ・メリットはマンザナー収容所の戦時転住局のプロジェクト指揮者でした。多くの責任のかかる大変重要な地位でした。彼は二，三の居心地悪い経験をしたのです。

ラルフは私どもにマンザナーで彼の迎えた最初のクリスマスの話をしてくれました。1942年12月7日に流血に至った暴動があって，収容所全体が逼塞してしまいました。子供も誰一人遊びに出ないし，バラックに明かりはないし，作業班も全く動きません。一週間，二週間と，マンザナーはゴーストタウンのままでした。その時福祉主任のマーガレット・グリーンが子供村のみなし児たちのためにクリスマスパーティーを開いたらと提案したのです。一隅にまとめられていたので，その子供たちは収容所を覆っていた暗雲に影響されていませんでした。贈り物を前にした子供たちがどこでもそうなるようにみんな大変うきうきして，楽しげにクリスマスキャロルの歌に加わりました。不意にメリットさんはこれらの子供たちの声以外にも音楽が聞こえるのに気が付きました。澄み切った明るい月光の射す中に飛び出して，彼はキャロルに加わりに来た少年少女の一団を見つけたのです。メリット夫妻とグリーンさんを先頭に，子供たちは歌いながら暗い収容所の中を巡り歩きました。すると一つ又一つと明かりがバラックに灯り，「メリークリスマス」と呼びかける声がして来ました。そしてマンザナーは蘇ったのです！

B：戦前に日本人に対して何か特別な態度とか感情といったものをお持ちでしたか。

K：いいえ，それはありません。オーウェンス・ヴァレーには日本人はいませんでしたもの。西海岸に住んでいたのとは訳が違いますから。

B：そうですね，あなた方は当時は言ってみれば孤立していらした。

K：その通りです。

B：従って，本当に何ら特殊な感情や態度は持っていなかったのですね。

K：私どもは真珠湾については仰天いたしました。当然誰もが仰天しましたわね。だけど，この国の個々人の日本人に対して特殊な感情を持つという事はありませんでした。

B：真珠湾の攻撃の間の日本人の行動については，ハワイや西海岸から出た多くの噂がありました。軍隊が通れないように道路を封鎖した日本人の話だとか，穀物を真珠湾に向けた矢の形に植えた話だとか，そういう話を何かお聞きになった事がありますか。

K：そういう噂も信じませんでした。いえ，私どもは当地では何も耳にしませんでした。新聞で読んだ事だけです。

B：ところで，それらの人々が実際にやって来てバラックを建て始める前に，この収容所を設置するという公式

の報知が何かありましたか。

Fig. 2 オーエンスヴァレーの商店主がマンザナー収容所建設労働者相手に地元新聞に載せた広告の一例

K：あれは大変こっそりやった事でした。

B：それでは，あなた方はそれについて全く知らないはずになっていた訳ですね。

K：私どもはああした人，よそ者たちが何のためにここらに来たのかさえ知りませんでした。

B：彼らの数は相当なものだったでしょう。

K：ええそうです。

B：当時彼らはどこに住んでいたのですか。

K：それははっきりしません。多分マンザナーの中にできた仮の住居に住んでいたのでしょう。

Kの夫：確かにそうだったのです。

K：彼らの多くは奥さんを伴っていました。

B：ほう，そうだったのですか。

K：ええ，彼らは嗅煙草なんか吸うし，本当に好ましくない性格で，それに本当に偏見が強いという事も後で分かりました。

Kの夫：政府が彼らを送り込んだんです。彼らはあの時政府のために働いて，収容所を建設していたんです。

B：あなたはご自分の意見をこれらの人々に何度も話されたとおっしゃいましたね。何らかの行動，たとえば地元の議員に収監について手紙を書くとか何かそういう事はなさいましたか。

K：いいえ，何故なら私どもが何が起こっているのか理解するより先にすべてが既成の事実になってしまったからです。私どもが何がどうなっているのか分かるより先に最初の日本人たちがもう収容所の中にいたんです……転住収容所の話など一度も耳にしませんでした。勿論，あれは最初の収容所でしたから，当然聞いた事もなかった訳です。

B：おっしゃる通りです。あれは1942年3月で，戦争が始まってすぐ後の事でした。

K：そうなんです。それからもう一つ後で分かったことですが，あなたのお話しになった従軍した日本人の青年たちですけれども，マンザナーにいた，言ってみれば刑務所に囚れていた彼らの両親や家族に，これらの青年たちが海外で獲得した名誉勲章が渡されたんです。

B：そうなんですか，収容所にいる間にですか。

K：ええ，当局が収容所に来て，両親や家族に名誉勲章を渡しました。

B：勲章を渡したのは誰でした。

K：政府でした。

B：兵士たちだったのですか。

K：きちんと正装した将校たちが，マンザナーに囚れていた人たちに勲章を渡したのです。ねえ，これは皮肉な事でしょう。

B：ええ，全くです。

K：私もそう思いましたの。

B：お差し支えなければ，戦争中においくつでいらしたか知りたいのですが。

K：40才位でした。

B：つまり，物事についてしっかりした意見をお持ちになれるお歳だったのですね。

K：ええ，そうでしたとも！

B：暴動が起こった訳ですが，本当にかなりの暴動だったのですか。

K：ええ，あれは暴動でした。

B：物的な損害は大きかったのですか。

K：いえ，いえ，それはありません。

B：町の人々がそれに気づいた時，収容所を更に恐れるようになりましたか，あるいはかえってあまり恐れなくなりましたか。どのように感じたのでしょう。

K：前に申し上げましたように，一人二人常に銃を手許に置いていた人がいました。他にはあまり話題に上った事はなかったのです。無論，収容所長のラルフ・メリットは，もう亡くなりましたけど，申し上げましたように実にたくさんの事を話してくれましたので，私もかなり混乱しておりますの。

B：彼はマンザナー暴動の間に所長だったのですか。

K：そうです。彼は好感を持たれておりましたし，日本人も彼を好いていたと思います。

B：彼は成功した初めての所長だったように思いますが。

K：そうです。

B：彼があなたにお話しになった事をなにか詳しく聞かせて頂けませんか。

K：えーと，あのクリスマスイヴの事を話してくれましたけれど，もうお話ししましたわね。

B：彼は暴動が始まる直前に所長になったんでしたね。

K：はっきりいたしません。

B：私の記憶が正しければ一週間と遡らなかったと思います。

K：はっきりいたしません。そうだったのでしょう。

B：そうだったと思います。他に彼は何を語りましたか。覚えていらっしゃいませんか。

K：それがですねえ，もう私の頭の中ではぼんやりとなってしまっているんですよ。あまり重要な事ではございませんでしたし，ただ彼と日本人たちとの接触と，彼ら〔日本人〕がどう感じていたか位です。

B：彼の日本人に対する感情はどのようなものだったのですか。彼はその事に触れましたか。

K：彼はきちんと仕事をしようとしていたんだと思います。でもその面ではあまり幸福ではないようでした。そういう風に彼は感じていたんです。でも彼は本当に親切で素晴らしい人でした。誰かあそこをうまく扱える人がいたとしたら，彼こそ適役だったと思います。

B：しかし町の人々は全く何も暴動に反応しなかったのですか。

K：いえ，相当に苛立っている人々もいました。

B：インディペンデンスの獄中に日系米人のリーダーが一人，ハリー・ウエノが入れられた訳です。町の人々はその事に全く反応しなかったのですか。

K：アレックス，あなた覚えていて。

Kの夫：反応があったとは思いません。あの事であらっぽい事は起こりませんでした。

K：町中の事について言える訳じゃないんです。誰かあの事でピリピリしていた人もいたかも知れませんが，私は知らないでいたんでしょう。

B：おっしゃる通りでしょう。

K：本当に町全体の人々がどのように反応したかを言うのは難しいんです。私は知らないでいたんでしょうから。でも私の友人たちに限って言いますなら，沈黙の共謀関係があったように感じました。みんなそれにつ

いてはしゃべらないでいる方を好んだんです。

Kの夫：そう，私に電話してマンザナーで何も売らないように警告して来た奴みたいなものですよ。彼はあの件については目一杯ピリピリしていたんですからね。さもなければあんな事はしなかったでしょうから。思いますに彼はあの件であんまり興奮したんで，ただもう誰かに何かを言わなけりゃならないように感じていたんでしょう。それで私が商売をしてるっていうんで私を選んだ訳です。

K：戦後，多分御存知でしょうけど，当局は日本人に財産を返そうという試みをしました。彼ら自身の財産，彼らが後に残して来た財産です。

B：ああ，はい，それは私も知ってます。

K：彼らは引きずり出されたんですよね。彼らには時間すら十分になかった……

B：彼らの多くは移動に三日間与えられただけでした。

K：ええ，ほんとにひどいものでした。それで彼らは財産を失ったのです。前にお話ししたあの図書館司書の言うには，多くの物を残して来た日本人が一人収容所にいたそうです。大変裕福な人で，白人の隣人を一人持っていました。自分の家具や貴重品や極く個人的な品などをどうしたら良いか分からなくて，彼は隣人に家具や貴重品を保管して貰えるよう頼んだのです。収容所に入ってその事を思い返してみて，彼は隣人に負担をかけているような気がして心配になり，戻って自分の家具を保管しておける場所を借りられるような別の算段ができないかどうか検討したく思いました。それで，彼らは付き添いなしでは出られないものですから，先の司書の御主人が一緒にロサンゼルスに付き添って彼の財産を見に出かけたのです。二人がその家へ行くと，隣人が戸口に出て，彼を見ても全くとぼけて，少しも知らないような顔をしました。彼らは20年間も隣同士で住んで来たのにです。それで日本人が言いました。「だって，私を覚えていらっしゃるでしょうが」「あなたなんか一度も見たことありませんね」と隣人は答えるのです。「だって，私が家具をお預けしたのを，私の冷蔵庫も，家具も，貴重品も皆お預けしたのを覚えていらっしゃるでしょうが」隣人はしかしそんなものは何も知らないと言い張りました。

B：そうだったのですか。彼はすべてを失くしてしまったんですか。

K：その男が彼の持っていた物をすべて盗んだんです。彼を連れていった人は仰天して，又憤慨したあまり，自分で何が起こったか分かるまで調査することを引き受けました。そうしたら隣近所の人たちがこの男がそれらをすべて売ったのを見たと言ったのです。そういう訳で，財産をこんな風にされた例もいくつかあったのです。

B：その人は何か少しでも取り戻しましたか。

K：いいえ，全く。

B：それでその人は隣人を訴追さえしなかったのですか。

K：しませんでした。それにもう一つ，彼らの持っていたお金は持っては来られませんでした。政府がすべて凍結してしまったのです。

B：その通り，預金すべてですね。

K：3，4年前になって初めて，このお金を日本人に返そうとする努力がなされたのですわ。利子をつけて返した訳じゃありません。1942年に取り上げた全く同じ額を返したのです。そして，勿論彼らの多くは死んでしまっていて，お金は取り戻せなかったのですから，私にしてみればこれもまた政府の失点なのです。彼らは財産もお金も失くしてしまってゼロから出発しなければならなかったのですわ。マンザナー収容所跡に立てられた記念銘板の事はお聞きになりましたか。お立ち寄りになってお読みになりましたか。

B：はい。

K：わたしは落成式に出席しました。誰かから話を聞かれましたか。

B：はい，私の先生のアーサー・A・ハンセン博士が院生の助手のベティー・E・ミットソンと一所に参りました。

K：その方たちも私どもが感じましたように，もう再び元に戻る事はないだろうという風に感じましたでしょうか。収容された人たちは自分たちを……あなたはお若くて戦前の日本人を覚えておいでではないでしょうけれど，色々な民族集団がある中でも，彼らは自分たちをアメリカ人だと考えている人たちだったのです。彼

らは自分たちに何々系などとハイフンをつけたりしていなかったのに，あそこへ行ってからは，チカーノやウーンデッドニーのインディアンたちのようなすべての抑圧されたマイノリティーと自分たちを同一視するようになり，決定的にハイフンのついた存在になってしまったのです。

B：そう感じられたのは落成式の時の事でしたか。

K：そうです。それで，後になって私は夫に申しました，「ここでは居心地が良くないわ。まるで私は招かれてさえいないみたい」って。

B：銘板の言葉遣いに賛成されますか。

K：ええ，全く賛成です。勿論彼らは「搾取」の代わりに「貪欲」と入れたかったのですわ。

B：経済的搾取ですね。

K：ええ，それについてはやかましい議論があったのです。当局は銘板に「強制収容所」という言葉を使わせようとしなかったのです。御存知の通り。

B：それも又多くの議論をひき起こしましたね。

K：ええ相当の議論でした。でも当局は彼らに「貪欲」という言葉は使わせなかったのです。

B：何としてもね，それじゃあ真実に近すぎたでしょうから。この収容所に関する知識があなたの現在の日本人に対する観点に影響しましたか。こんな風な事が将来再び起こり得ると思いますか。

K：いえ，それは起こっちゃいけないのですけど！

B：しかし起こり得ると思っていらっしゃる訳ですか。勿論起こらないに越した事はありません。ただあなたは起こり得ると思っていらっしゃるんですか。

K：いいえ。あの時のヒステリーは極めて高い所から始まったように思います。ローズヴェルト大統領に始まって下へ広まったんです。

B：彼が行政命令に署名したのです。

K：そうです。行政命令に署名したのは彼です。ですから過ちはずばり彼の目の前から発してあらゆる所へ及んだのですね。人々はただもうヒステリーに圧倒されてしまいました。あのような事が再び起こり得るなんて信じられません。それはなしにして頂きます。

B：デウィット将軍と彼がこの件に果たした役割を御存知ですか。彼はこの決定に強く関与した，と言いますか，実の所これは言ってみれば彼の計画だったのです。彼の大統領への進言によるものでした。そのような事を何かインディペンデンスでお聞きになりましたか。

K：ああ，それですが，沈黙の共謀関係についてお話ししましたわね。私自身は日本人を気の毒に思う気持ちで一杯だったと思います。勿論海岸地方の人々は日本人が照明灯を持って立って合図を送っていたと考えていたんですわ。

B：それは私が前に触れたような噂ですね。

K：ええ，本当にあらゆる種類のあり得ない事が起きたという訳ね。勿論，彼らが大統領に送った電報はお読みになりましたよね。

B：いいえ，それは知りません。

K：お読みしますわ。

B：日系米人がそれを送ったんですか。

K：そうです。お分かりと思いますけど，大層役に立ったんですよ。1940年に日系米人市民連盟（JACL）は連盟の綱領として次のように記しました。

「私は自分が日本人を祖先に持つアメリカ市民である事を誇りに思います。何故ならまさにこの私の出自が私にこの国のすばらしい諸々の長所をより十全に評価させてくれるからです。私はこの国の制度，理想及び未来を信じます。私はアメリカのスポーツマンシップとフェアプレイの姿勢が，市民としての資質と愛国心を行為と達成によって判断し，身体的特徴に基づいて判断はしないと固く信ずるものであります」1941年に日系米人市民連盟はつぎのような電報をローズヴェルト大統領に送りました。「この厳粛な時にあたって，我々は我々の全面的な協力を，大統領殿，貴方と我等が国とに対しお誓いします。我々が，自分たちがアメリカ人であって，アメリカに忠実であると心から弁えている事に何らの疑問もあり得ようはずがなく，また

あってはなりません。我々はこの事をあなた方すべてに証明しなければなりません」

B：もう一度，その日付はいつでしたか。

K：電報は1941年に送られました。

B：正確な日付はお分かりではないですか。

K：1941年12月7日です。

B：真珠湾の後という事でしょうか。

K：ええそうです。

B：それは興味深い事です。大統領は恐らくそれを全く眼にしなかったか，あるいは単に完全に黙殺したのでしょう。

K：ええ，黙殺したのです。

B：もう他に質問はございません。すべてに答えて頂きました。何か付け加えたい事がおありですか。

K：他にはもう思いつきません。いえ，一つありましたわ。収容所が放棄され，戦争が終わった後，彼らはすべてをそのままにして去りました。バラックの大部分は移されました。バラックを御存知でしたら，オーウェンス・ヴァレー一帯でご覧になれますわ。

B：はい，町のモーテルの一つがそうじゃないかと思うんですが。

K：そうです。それから畑には作物を置いて行きました。彼らは有刺鉄線の外側で作物を育てていたのですわ。

B：それを育てる仕事をしに行く時，彼らは監視付きだったのですか。

K：ええ勿論そうです。

B：そうでしたか。軍はマンザナーでの占領期間を通じてそこにいたのですか。

K：ひょっとしたら軍属の監視員だったかも知れません。とにかく，彼らは畑にキャベツを残して行きまして，挙句の果てにそれらのキャベツが腐り始めたんです。二，三週間もすると高速道路を通るのも耐え難くなりましたわ。腐ったキャベツがどんな臭いを発するものか，想像もできないくらいです。

B：ちょっと収容所の話に戻ってよろしいですか。収容所にいらして，彼らにもてなされたとおっしゃいましたね。

K：ええ，彼らのクリスマスの演し物でね。

B：劇のようなものだったのですか。

K：いえ，音楽とかコーラスとか。

B：楽器は何を使ったのですか。それともただ声楽だけだったのですか。

K：覚えているかぎり声楽だけでしたけれど，でも確かにピアノはありました。

B：普通のクリスマスの劇のようだったのですか，何をやったのでしょう。

K：劇ではありません。演し物だったんです。

B：ヴァラエティーショーみたいなものでしょうか。

K：ええ，教会でやるようなものですわ。歌があって，活人画がある。

B：それでアメリカ人が少々と多くの日本人が列席したんですね。

K：その通りです。

B：子供も大人も役割があったんですか。

K：その通りです。

B：白人の教会での演し物と似たようなものでしたか。

K：ええ同じ発想のものでした。

B：このクリスマスがあなたのいらした唯一の機会でしたか。

K：そうだと思います。他にあったら覚えているでしょうから。

B：それでは，もう付け加えられる事がなければ，カリフォルニア州立大学フラートン校日系米人オーラルヒストリー，プロジェクトになり代わりまして，ご協力に心から感謝いたします。

(4)エロディー・ドルーは，OHCによれば1903年生まれ。1973年12月6日にインタビューを受けている。インタビュー開始時刻は分からないが，テープは20分間のものが保管されている。以下，Bはインタビュアーのベルタニョーリ，Dはインタビュイーのドルーをさす。

B：ドルーさん,，あなたのご家族並びに個人的背景を伺わせて頂けますか。

D：私は1903年にカリフォルニア州ローンパインで生まれました。父のフェリックス・P・メイザンは1869年まだ小さな子供の時分にトゥオラム郡からソノーラ峠を越えて家族と共に当地へ参りました。祖父のチャールズ・メイザンは前の地で店を持っておりましたが，1869年にローンパインへ参りましたのはカリフォルニア南部へ行く途中でした。ですけど大変豊富なシェロゴルド鉱山の事を聞いたのです。祖父はローンパインに留まって残りの生涯をそこで過ごしました。彼はシェロゴルドとパナミント市にも何年間か支店を持っておりました。母の一族は1893年にオーウェンスヴァレーへ参りました。母の名はハンコックです。一族はモルモン教徒でした。もっとも母はモルモン教徒ではなかったのですが，モルモン教の背景は持っていた訳です。父の一族はフランス人でした。ボルドーから来たのです。父は1865年にトゥオラム郡コロンビアで生まれました。

B：第二次世界大戦が勃発した時は，どこに住んで何をしていらしたのですか。

D：私どもはサウスヘイウィーの方に移っておりまして，夫は水利エネルギー局で働いていました。サウスヘハイウィーにおりました時，これはオランチャの南にあるのですが，夫はサウスヘイウィー貯水池の管理人をしておりました。

B：さて，正確にはサウスヘイウィーとはどこにあるのですか。

D：カリフォルニア州オランチャを下った所です。

B：インディペンデンスとの関係で言うとどこになるんですか。

D：オーウェンス湖を下った所です。

B：それは現在干上がっている湖ですね。

D：そうです。それでそこより下った所なんです。ローンパインよりはほぼ35マイル南，インディペンデンスよりはほぼ50マイル南ですわ。

B：ああ，分かりました。それであなたは当時主婦でいらしたんですか。働いてはいらっしゃらなかったんですね。

D：主婦で子育てをしておりました。

B：お子さんは何人おありですか。

D：5人です。上に二人男の子がありまして，二人とも海軍に入りました。

B：戦時中ですか。

D：戦時中彼らは兵役に行きましたけど，勿論戦争が始まった時には兵役についていたのではなかった訳です。一人は1944年に入りまして，もう一人はそれより早く入りました。娘たちは皆妹です。

B：息子さんたちは海軍で何をしていらしたのですか。

D：一人は補給係で，もう一人は技術兵でした。

B：お二人とも船に乗っていらしたんですか。

D：いえ，上の息子はオーストラリアのブリスベンに9ヶ月おりまして，それから14ヶ月アドミラルティー諸島へ，それから又別の所へ行きました。それで下の息子のキースの方は船に乗っておりました。

B：真珠湾が起こった時には何をお考えでしたか，真珠湾の前に日系米人と何らか接触をお持ちだったか，あるいは彼らについて考えたような事はおありでしたでしょうか。

D：いいえ。ローズヴェルト大統領の話を聞いた時はアイロンをかけていて泣き出したのを覚えています。服にアイロンをかけながら涙がアイロン台の上にぽろぽろと落ちました。何かせずにはおれなかったのです。

B：それから，そのすぐ後で息子さんたちは海軍に入られたのですか。

D：はい，上の息子が18才になるとすぐ入りました。彼は1924年生まれで，1月には49才になります。もう一人の息子は1926年に生まれました。私は上の息子をレディオと呼びますけれど，名前はクロードなんで

す。ずっとレディオと呼ばれて来ましたけど。私たちも，ふたりが出征しなくてはならないのは分かっていましたし，結局そうなりました。それで夫も行きたがったのですが受け入れられませんでした，それで・・・

B：町の人たちはどんな風に真珠湾に反応しましたか。

D：ローンパインの住民という意味ですか，私は勿論ローンパインの生まれですけど，当時はサウスヘイウィーに住んでおりましたから。

B：そう，地域全体としてはどう反応していたのでしょう。あなたのお友だちとか，お仲間とか。

D：そうですね，この郡の人々はとても勇敢な人たちなんです。

B：彼らはすぐさま戦争に備えだしましたか。何が起こるのかは分かっていたに違いない。

D：ええ，政府のする事なら何であろうと，そう，私たちは後に続きましたわ。私たちに要求されたものが何であれ，私たちはしたんです。

B：マンザナー収容所とは何か接触をお持ちでしたか。

D：いえそれはほとんどありませんでした。せいぜいただそばを車で通る位のものでした。

B：何かを取りにいらしたような事を前に言ってらっしゃいましたね。

D：ああそうでした！　夫が家の牛のために藁を少し欲しいと思いまして，藁を持っている人を辿って行くと，何と彼の働いているマンザナーに辿り着いてしまったんです。そこへ行きまして，私たちはその時やって来ていたバスに詰め込まれた日本人を見ましたわ。あれは収容所に最初に来た日本人の一部だったと思います。

B：ほう，それではその時到着したのはそれほど大群が押し寄せてきたのではなかったんですね。

D：ええ，違いました。当時は建設中でした。

B：それでも真珠湾の後ではあった訳でしょう。

D：ええ，そうです。真珠湾の後でした。

B：日系米人が運転してマンザナーへ向かう車の隊列を見ましたか。

D：見ました。車が来た時は家にいたんです。彼らがやって来ているのが分かったので私もそこへ車で行ってみました。私たちはハイウェイから１マイル離れた所に住んでいましたから。そこで座って車の列が通り過ぎるのを眺めていたんです。とても大事だと思いました。車の種類も何から何までありました。風が吹きつけていて，寒くて，３月の事でした。私は彼らが通り過ぎるのを見ていたのです。

B：日系米人からはどのような印象をお受けになりましたか。彼らは，こうした追いたてをくうという事に皆怒っていましたか。

D：どう感じたか今じゃ分かりませんね。当たり前じゃないことが起きてるとは感じましたね。それを言葉で形容したのか本当に覚えていません。私はただ眺めて感じてただけ。けどそれをどう考えたらいいのか本当に分からなかったわね。。

B：車で通り過ぎていく日系米人の顔をのぞきこんだはずでしょう。

D：道に沿って車を停めていたものですから，彼らの顔はあまり良く見えませんでした。でも風が吹きつけて，あれはみじめな日でしたわ。知らない土地へ来るのにはあまり良い日和ではありませんでした。

B：１万人の日系米人があそこへ移された時のこの辺に住む人々の反応はどんなものでしたか。

D：政府のした事でした。私たちは言ってみれば従ったのですわ。

B：人々はびくついてなかったのですか。日系米人を恐がるとか，彼らが収容所を脱出するのを恐れてるという事はありませんでしたか。

D：誰かが，恐いとかそんなような事を言うのを聞いた覚えはありません。

B：あなた個人としては，当時彼らはあそこにいるべきだとお考えになりましたか。

D：分かりませんでした。

B：それが正しい事だとお考えでしたか。

D：全く分かりませんでした。

B：ヨーロッパ戦線での日系米人連隊について聞いた事がおありですか。

D：ええ。

B：彼らは非常に沢山の勲章を受けた部隊でした。それはそもそもあなたの日系米人に対する意見に影響しましたか。それで彼らの事をより高く評価するようになりましたか。彼らはとりわけ勇気があるとか，そのような事をお考えでしたか。

D：そう，私は人間は人間であるんだと，そして戦争というものはそこに至ってみれば決して本当に正しいものではないんだと考えました。罪のない者も罪のある者と一緒に苦しむのです。

B：彼らのヨーロッパでの大活躍をお聞きになった時，収容所の事をお考えになりましたか。そうして収容所にいた同じ人々がヨーロッパで戦っているのだという事が分かっていらっしゃいましたか。その時それは間違った事だとお思いでしたか。

D：そう，良い日本人がたくさんいるかも知れないとは勿論思いましたよ。いるはずだと分かっておりました。私の伯父の一人が日本人兵士の一人がバスでマンザナーを去るのを見かけました。その兵士は収容所の家族を訪ねて来ていたのです。伯父が言いました，「ご覧，あの人は自分の国のために戦っているんだ，それなのにここで彼の家族は抑留されているんだ」それで私は言いました，「ジョージ，戦争が良いものだった事があって？」そしたら彼も「その通りだな」と言ったのです。この伯父は物事を色々考える人でした。

B：もし日系米人が抑留されていなかったとしたら，彼らが実際に我が国の軍事努力に妨害工作をしたとお思いですか。またもし日本軍がカリフォルニアに侵入したとしたら，日本軍を助けたとお思いですか。

D：さあ，分かりません。この辺にはドイツ人もたくさんいましたし，勿論彼らは抑留されていませんでした。でもどうなんでしょう。あれは本当に突然起こりましたから。それに勿論私たちはその事については何も、とやかく言うべき事はなかったのです。

B：日系米人の多数は実の所アメリカ市民である事にはあなた方はお気付きでしたか。

D：ええ私たち気付いていたと思います。気付いていたはずです。

B：一つ本当に主観的な質問をさせて下さい。この収容所のような出来事が将来再び合衆国で起こり得ると思いますか。たとえば私たちがスウェーデンと戦争をする事になったとして，私たちはすべてのスウェーデン系アメリカ人を幽閉する事ができると思いますか。

D：いえ，私はあれが再び起こらぬ事を望みます。再び起こらぬ事を望み，祈ります。

B：しかしながら状況が同じであれば起こり得ると思いますか。人々が同じように反応すると思いますか。

D：思いません。でもそうなれば人々は考えてしまうのではないでしょうか。

B：そうですね。一般的に言って，収容所がオーエンス・ヴァレーの住民に遺した影響で存続しているものは何だとお考えになりますか。彼らはマイノリティーに対しより寛容になったとお思いですか，逆により寛容でなくなったとお思いですか。あの事が彼らの態度を変化させたとお思いですか。

D：この地の人々は昔よりはマイノリティーに寛容になったと思います。本当にそう思います。

B：収容所がその事に影響したと思われますか。

D：そういう風に考えてみた事は本当の所ありませんでした。私たちはここまでやって来る多くの日本人と知り合いになりました。彼らは博物館に立ち寄ります。そして時折マンザナーにいた人もその中に入っているのです。

B：それでは彼らとお話しになるのですね。

D：ええ，そうです。

B：何をお話しになるのですか。

D：博物館にカップルが立ち寄った事がありました。大変気持ちの良い人たちでした。そして勿論今私たちはマンザナーにかかわる展示品を拡張しています。日本人がマンザナーで作られたものやなされた記念の品を持って来てくれるので，大いに助かっています。ともかく，私たちの持っていた写真の一つ，というのはもうないからですが，その中の葬儀のシーンに一人の婦人が夫の姿を認めたのです。それから花嫁，花婿の写真も一枚あったのですが，一人の婦人が友人の姿を見つけました。最初にたまたまこの展示を出す事になった時の事情は興味をお持ちなんじゃないかと思います。一人日本人の男性がここに来まして標示〔筆者注・収容所から外へ出る事を被収容者に警告する標示〕を指さすんです。私は彼の言いたい事がほとんど分かりま

せんでした。私は彼にアンセル・アダムスの写真を載せている『生まれながらに自由，平等』というタイトルの本を見せました。彼はその本を即買いたがりました。でもここには勿論二冊か三冊しか持ち合わせがありませんでした。それで私たちはマンザナー専用の展示をするべきだと決めたのです。それから展示を出しまして，もう何年にも，多分6年になります。

B：収容所について，あるいは一般的な事について何かつけ加えたい事がおありですか。

D：彼らがあそこに庭を持っていて，それが実にきれいだという話は聞かされてきました。私は後から収容所に参りました。収容所閉鎖の時の競り売りに行ったのです。私たちは毛布を何枚かと調理用鉄板を一枚買いました。鉄板は長四角の幅広いものでした。それは多人数の集まりのある時に使ったり，貸し出したりもします。しかし一枚手に入れるには6枚買わねばなりませんでした。一組買わねばならなかったのです。すべてがまとめ買いで売られていました。私たちの友人の一人が有志を募って他の5枚を買う人を見つけました。お陰で私たちは素敵な鉄板を手に入れる事ができました。

B：収容所で働いていた娘さんがおありだというお話でしたね。

D：義理の娘です。

B：それで，収容所時代について，彼女は彼らについて何と言っていましたか。

D：さあ，それがですね，彼女にはそれについてあまり質問しませんでした。

B：日系米人について何か言っていたでしょう。彼らの彼女への態度は丁寧でしたか。

D：ええ，とても丁重でした。あそこでは彼女はとても快適にやっていました。

B：彼女は収容所では何をしていらしたのですか。

D：さあ，何か事務的な仕事をしていたと思います。

B：直接誰か日系米人と仕事をしていらしたのですか。たとえば日系米人の助手を使っていらしたでしょうか。

D：さあ，それは彼女に聞いてみなければいけません。

B：彼女は日本人に批判的でしたか。

D：そうは見えませんでしたけど，本当の所知らないんです。何でしたら，彼女とインタビューできるかどうか聞いてみてもよろしいですわ。

B：ああ，有り難うございます。貴重な時間を割いて頂いてありがとうございました。

D：何か少しでもお役に立てたらよかったんですけど。

B：大変有益なインタビューでした。カリフォルニア州立大学フラートン校日系米人オーラルヒストリー・プロジェクトになりかわりまして，もう一度お礼申し上げます。

III. 総　　括

(1)ジレスピー，(2)匿名の女性，(3)クレイター，(4)ドルーの4人の，マンザナー建設時（1942年）の年齢は，誕生日を無視すれば各々(1) 47才，(2) 22才，(3) 40才，(4) 39才であった。

(1)ジレスピーは，それまで日系米人との関わりも関心も薄く，身内に兵役に就いていた者がいたこともあって日系米人への視線は冷ややかであったし，インタビューを受けた30年後（1973年）にも観方は変わっていない。日系米人が好遇されていたことをしきりに口にする。

(2)匿名の女性は，軍属だった夫の勤務のため，マンザナーとツールレーク二つの収容所と関わりがあったという珍しい経歴を持つ。ジレスピーと異なり，収容所が町の経済に好影響を与えた事を積極的に認めている。市民権を持つ日系米人の収容については是としたが，専門職の日系米人を引き合いに出し日系米人に対するステレオタイプは避けようとしている。

(3)クレイターは，歴史への関心が強い。収容所を「転住収容所」ではなく「強制収容所」であったと言い切っている。また，白人一般市民の狼狽する様についても批判的である。日系米人の少女二人（出征する婚約者を見送る少女と，姉の秘書であった少女）についての挿話の紹介は好意的なものであるが，ある程度ポジティブなステレオタイプととれない事もない。マンザナー暴動（1942年12月7日）直後のクリスマスの逸話も，財産を横取りされた日系米人の逸話も，極めてヒュメインな視点をうかがわせる。JACL（日系米人市民連盟）への言及など幅広い知識と同情心がうかがえる。尤も，「沈黙の共謀関係」という言葉に，戦時下の状況が偲ばれる。

また，日系米人のことを，強制収容前は「アメリカ人と自己認識していた集団」であったものが，収容を経てハイフン付きアメリカ人（hyphenated American）になったと記している。しかしながらこの観方は，社会のメインストリームからの偏見（社会心理上のもの）や差別（制度化されたもの）が，日系米人の自意識のあり様如何を問わず，日系米人を明らかにハイフン付きアメリカ人としていた歴史的事実を見逃していよう。

(4) ドルーは，息子二人を海軍に送っていたが，それだからと言って日系米人に反感を持つことはなかった。彼女の視点はコンフォーミスト的であるが，自らの戦時中の同時代的な感覚について述べる際には率直であり，現在は，オーエンスヴァレーの住民がマイノリティーに対して戦時中より寛大になったと述べている。

ちなみに，マンザナー収容所の存在がオーウェンス・ヴァレーの住民に与えた影響についで完全に同時代的な報告としては，オーウェンス・ヴァレーの住人で元ジャーナリストのルディー・ヘンダーソンがライフ誌に寄せた（但しついに活字にはならなかった）原稿があるのみだと言う。その内容と30年後のインタビューの内容との「乖離」と「相関」については，*Camp and Community* の序文で，ロナルド・ラーソンとジェシー・ギャレットが触れている。いずれにせよ，「インヨー郡の住民〔注：当時7,625人〕は戦前は殆ど日系米人との接触がなく，保守的であり，『よそ者』を信用せず，政府の誠実さに対して懐疑的であるが同時に政府の権威に従順でもある」というヘンダーソンの指摘は，30年たってマスヒステリアから解放された状況の中でなされたインタビュー記録を読む際にも，背景として知っておくべきであろう。

嘗て，ジョン・スタージェス監督でスペンサー・トレイシー主演の『日本人の勲章』（'Bad Day at Black Rock', 1954）という佳作があった。隻腕となった将校（スペンサー・トレイシー）が荒涼たるネヴァダ州の町外れのフラッグ・ストップにおりたつ。戦死した元部下で自分の命の恩人の日系米人に与えられた勲章を，父親に届けに来たのだ。ところが，町の住民は「よそ者」に対して排他的であるばかりか，ことごとにスペンサー・トレイシーが部下の父親を探すのを妨害する。緊迫感の溢れる映画であった。

デウィット将軍の「ジャップは所詮ジャップだ。アメリカ市民であろうとなかろうと変わりはない！」（A Jap's a Jap, it makes no difference whether he is an American citizen or not!）という言葉は，真珠湾直後のアメリカ市民の間で人口に膾炙した。「カテゴライゼーション」が「偏見」に，「偏見」が「差別」に結びつくのが社会の力学であろうが，カテゴライゼーションとして「アメリカ市民」よりも「ジャップ」が先行したのは，人種主義故であった。社会を理解し，自らの身を守るためにカテゴライゼーションは必要なものであろうが，カテゴライゼーションが功罪両面を持ち，何より多層的である点に眼を向けることが，ヘイトクライムを初め，生じ得る差別やマスヒステリアを避けるためには不可欠になろう。

付　記

Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley (Jessie A. Garrett and Ronald C. Larson ed., CSUF Oral History Program, 1977) は元々，アーサー・A・ハンセン博士より原書を贈られ，また翻訳してみないかという誘いもうけた。前述の拙訳『リロケーション—日系米人強制収容の証言』と言ってみれば合わせ鏡のような役目を果たすだろうと思い，翻訳作業にとりかかった。しかし，ここ何年か明石書店が Tuttle-Mori Agency を通じて翻訳権を取得しようとしたが，（インタビュー中に屢々現れる表現を用いれば）red tape に阻まれたためであろうか，CSUF より朗報は聞こえてこなかった。それ故，強制収容についてのプロジェクトに参加した知人達からの慫慂もあり，著作権を侵害せぬ範囲内で，紀要のページを藉りて紹介していくこととした。浄書の一部は嶋井亮輔君が手伝って呉れた事を記しておく。